

日語母語話者「反問」的現象

—由「日語談話資料庫(CSJ)」自由對話中的事例分析來看—

吳 秦芳*

中文摘要

在本研究當中是以「日語談話資料庫」中「自由對話」的疑問—應答連鎖當中來探討日語母語話者間的「反問」現象。以量和質的方式去探討母語話者間的方法,頻率以及性差。資料的數量是母語場面10個會話,發話者都是介於20~40歲,初次見面的會話。在本研究是觀察在CSJ中「自由對話」裏出現的反問形式和機能的特徵,另外從反問的表現方式和機能來探討溝通中的禮貌策略。結果如下:在此次的談話資料中,可以觀察出有「迴響+a型」,「迴響型」,「非迴響型」三種表現形式。以機能的角則發現有「理解確認要求」,「說明要求」,「反復要求」,「聽取要求」四種策略。頻率上則是「理解確認要求」的策略和「非迴響型」的形式出現比率較高。再者,在反問的情況下,「理解確認要求」的策略在主張保留的部分則是顧及到給對方消極的面子,意即和禮貌性理論有所相關。

關鍵字:「反問」的策略,日語談話資料庫(CSJ),表現形式,
表現機能,禮貌理論

* 真理大學應用日語學系副教授

The research of Japanese native speakers' 「Clarification Questions」

—by using the data of "free dialogue" in CSJ (Corpus of Spontaneous Japanese)—

WU CHINFANG*

Abstract

This research was conducted to analyze the Japanese native speakers' 「Clarification Questions」 with the data of 「Free dialogue」 in corpus of 「Corpus of Spontaneous Japanese」. The method, frequency and gender of 「Clarification Questions」 will be observed quantitatively and qualitatively through the way of 「ask-answer」. The data consists of ten dialogues by native speakers, every dialogue goes to 10 minutes and speakers don't know each other. They are all Japanese native speakers and between the year from 20 to 40. This research focus on the form and function of 「Free dialogue」, we can get well known of the politeness strategy between conversation from the actual situation. The result is as follows. We can find three types in 「repeat」 strategy through this corpus. These three types are 「Non-echo type」、 「echo type」、 and 「echo+q type」. About the function of 「Clarification Questions」, the strategy of 「comprehension-confirm request」、 「explanation request」、 「repetition request」、 「hearing request」 can be found. The strategy of 「comprehension-confirm request」 and 「Non-echo type」 are used frequently. As to the strategy of 「comprehension-confirm request」, due to the characteristic of 「reserve the insistence」, we can say it is kind of negative politeness. From the point of 「negative politeness」, it shows the strategy of 「understand-confirm request」 has relationship to politeness theory.

Key word: 「Clarification Questions」 strategy, 「Corpus of Spontaneous Japanese (CSJ)」, expression form, function, Politeness theory

* Associate Professor, Aletheia University, Taiwan

日本語母語話者の「聞き返し」の様相

－「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」の「自由対話」の事例分析から－

呉 秦芳*

要旨

本研究では、「日本語話し言葉コーパス」の「自由対話」の質問－応答連鎖における日本語母語話者間の「聞き返し」について、その方法、頻度及び性差を量的、質的に分析した。データ数は、母語場面 10 会話で、発話者はいずれも 20 代～40 代、初対面約 10 分の会話である。本研究では、CSJ の「自由対話」における、聞き返しの形式と機能に焦点をあて、その使用実態などの様相から、コミュニケーションにおけるポライトネス・ストラテジーを明らかにする。その結果、今回の談話資料では、表現形式における「聞き返し」ストラテジーの分類に関して、「非エコー型」、「エコー型」、「エコー型 + a 型」の 3 種類の聞き返しが観察された。機能における「聞き返し」ストラテジーの分類に関して、「理解確認要求」、「説明要求」、「反復要求」、「聞き取り要求」のストラテジーが見られた。その中の「理解確認要求」は主張を留保するという点においてネガティブ・ポライトネスと見なし得る側面を持つことから、ポライトネス理論の機能と関わりがあることが示された。

キーワード：「聞き返し」ストラテジー、日本語話し言葉コーパス (CSJ)、表現形式、表現機能、ポライトネス理論、

日本語母語話者の『聞き返し』の様相

* 真理大学応用日本語学科副教授

日本語母語話者の「聞き返し」の様相

－「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」の「自由対話」の事例分析から－

呉 秦芳

1. はじめに

人と人がコミュニケーションを行うとき、自分の言っていることが相手によくわかってもらえなかったり、逆に相手の言っていることがよくわからないということがある。けれども、お互いに話を続ける意思があるのなら、相手と自分との間に意思疎通の回復がうまれる。わからなくなりかけた会話を立て直すためには、やはりそれなりのストラテジーが必要である。つまり、「聞き返し」と呼ばれる相互作用である。

日本語学習者はコミュニケーション・ストラテジーをよく使っていた。その中で「聞き返し」は、最も頻繁に使用されているストラテジーであったが、日本語学習者が「聞き返し」の表現形式に関する知識が十分でなかったり、「聞き返し」を行ってもなかなかスムーズに問題の解決に至らないものも見られた。相互理解の混乱に対処する修復は、母語話者にとっても、円滑な意思疎通に通ずる重要なストラテジーであろう。日本語母語話者の伝達能力を知るには、日本語母語話者のコミュニケーション行動を分析しなければならない。その分析を通して、日本語母語話者の「聞き返し」の言語規則及び言語使用規則の一端を知ることができる。

これまで、日本語学習者の「聞き返し」ストラテジーの使用に関する先行研究は多くなされている。しかし、日本語母語話者間における「聞き返し」の現象はあまり触れられていない。相互理解の混乱に対処する「聞き返し」は、母語話者

にとっても円滑な意思疎通に通ずる重要なストラテジーであろう。本研究は「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」の「自由対話」の質問—応答連鎖における日本語母語話者間の聞き返しに関する方法、頻度及び性差を中心に探求していきたい。本研究では、CSJ の「自由対談」における聞き返し表現の形式と機能に焦点をあて、その使用実態などの様相から、コミュニケーションにおけるポライトネス・ストラテジーを明らかにする。その目的は日本語学習者の話す能力、主として対話場面での会話力を養成する上で、適切な「聞き返し」の仕方を指導することが効果を生むのではないかと考え、分析・考察を加えるものである。

本稿では先行研究を踏まえた上で、以下の手順に沿って考察を進める。

- (1)文字化された CSJ の「自由対談」の資料から日本語母語話者「聞き返し」のストラテジーを抽出した。
- (2)機能内での「聞き返し」ストラテジーの形式を分析した。
- (3)抽出された「聞き返し」ストラテジーを機能ごとに分類した。
- (4)その使用実態などの様相から、コミュニケーションにおけるポライトネス・ストラテジーを明らかにする。

2. 先行研究

日本語の会話における「聞き返し」に関する研究には、尾崎 (1992, 1993, 2001)、猪狩 (1999)、大野 (1999)、池田 (2003) などが挙げられる。

まず、尾崎 (1992) は、初級学習者は「ですか」をつけずに、相手の発話の一部を単に繰り返す方法を主に用いており、母語話者の場合には「ですか」をつけた丁寧型を多く用いているが、初級学習者、日本語母語話者共にエコー型をよく使っていると論じている。「聞き返し」の発話意図に関して、尾

崎（1992）は学習者が使用している「聞き返し」の発話意図を「反復要求」、「聞き取り確認要求」、「説明要求」、「理解確認要求」、「反復・説明要求」「聞き取り確認・説明要求」の6つに分類した。

また、尾崎（1993）の研究によると、学習者の発話意図が「説明要求」か「反復要求」が曖昧な「聞き返し」は失敗することが多いと述べている。なお、「聞き返し」の表現形式について、尾崎（2001）は先行する相手の発話を繰り返すことによって「聞き返し」を行うかどうかという観点から、相手の発話の全体または一部を繰り返さない「聞き返し」を非エコー型、繰り返す「聞き返し」をエコー型と二つに分類した。

猪狩（1999）は、初級学習者が使用している「聞き返し」の表現が明確ではない、また限られているため、自分の目的にあった表現について勉強する必要があると論じている。

大野（1999）は「聞き取り確認」の場合は初級学習者でも「説明要求」と「反復要求」の場合は成功率があまり高くないが、「聞き返し」の成功率が高いと指摘している。

池田（2003）の分析を通して、ビジネス日本語学習者の使える「聞き返し」ストラテジーの形式は非常に限られたものだけであることや、ビジネス日本語のテキスト中には、説明要求の機能を持つ「～ってなんですか」のような形式や理解確認要求の機能を持つ「～のことでですね」、「～ですね」等の「聞き返し」ストラテジーが提示されているにもかかわらず、学習者が現実の会話においてそれらの形式が使用できず、効果的な「聞き返し」ができていないことが明らかになった。

しかし、以上の研究はいずれも、会話の組み合わせの性差が考慮されておらず、日本語学習者が使用している「聞き返し」に限定されている等の問題もあるようである。本研究ではこれらの点に配慮し、分析対象データの条件をより厳密に統制し、日本語母語話者の条件を最大限同一に設定した上で

分析を行う。また、今までの先行研究では、日本語母語話者が言語能力に制限のある第二言語学習者とコミュニケーションする際にどのような「聞き返し」を行うかに焦点が置かれていたが、本研究では日本語母語話者間における「聞き返し」の特徴に視点を移し、分析・考察してみる。

3. 調査方法

3.1 聞き返しの定義

本研究における「聞き返し」ストラテジーとは、「相手の話が分からない、聞き取れないという問題に直面した際、それを立て直すために相手に働きかけるストラテジー」と定義する。聞き手は、耳から入ってくる情報の流れを効率よく処理するために、さまざまなストラテジーを用いていると考えられるが、このような処理のストラテジーの中、話し相手に助けを求めるのが「聞き返し」である。

「聞き返し」には弱いものと強いものがある。下降音調で「はあ」とあいづち的に発話されるような「聞き返し」は、弱い「聞き返し」である。それは「聞き返し」とは認められず、期待したような反応を引き出せないこともある。一方、「佐藤さんって、九大の佐藤さん?」、「何?」のような「聞き返し」は、相手に説明や反復をはっきり求める、強い「聞き返し」である。

3.2 会話データの収集

データ数は、母語場面 10 会話で、発話者はいずれも 20 代～40 代、初対面約 10 分の会話である。本調査で提示した会話例は CSJ における「自由対話（接触場面 10 会話）」から収集されたものである。具体的な内容は、話題の制約なしに、自由に対話を行うものである。文字化の方法としては、BTSJ（宇佐美 2007）に準拠している。「CSJ」から取得したインタ

ビューアー（以下、Lと省略）と応答者（以下、Rと省略）のデータの内訳は次の[表1]の通りである。角括弧はデータIDを、左端の数字は行番号を、L/Rは話者IDを示す。文字化の方法としては、BTSJ（宇佐美2007）に従う。ここからは、発話の「機能や効果」を押さえながら、談話レベルで分析していく。また、女性のインタビューに対する、男性、女性の応答者の「聞き返し」のストラテジーを比較して、その違いを探求する。

[表1] 「CSJ」に取材したインフォーマントの背景¹

ファイル		インタビューアー(L) (出身地・年齢)	応答者(R) (出身地・年齢)
女－男 L-R	D03M004	神奈川県・30代	神奈川県・20代
	D03M0017	埼玉県・20代	埼玉県・20代
	D03M0037	東京都・30代	神奈川県・30代
	D03M0048	埼玉県・20代	京都府・40代
	D03M0053	神奈川県・30代	北海道・20代
女－女 L-R	D03F008	神奈川県・30代	神奈川県・30代
	D03F0036	千葉県・40代	神奈川県・30代
	D03F0040	東京都・30代	神奈川県・30代
	D03F0045	神奈川県・30代	神奈川県・20代
	D03F0058	埼玉県・20代	東京都・30代

¹ インタビューアー(L)と応答者(R)のペアについて、ファイル名のFは女性と女性を指すが、ファイル名のMは女性と男性を表す。年齢、性別の変数を配慮しているため、CSJに含まれる対話データからD03M004、D03M0017、D03M0037、D03M0048、D03M0053、D03F008、D03F0036、D03F0040、D03F0045、D03F0058の10対話を標本として選び、作成した。従って、これは、無作為抽出ではない。

3.3 「CSJ」とは

「CSJ」¹とは、国立国語研究所、通信総合研究所、東京工業大学の三者が共同開発した現代日本語の話し言葉研究用のデータベースである。自発性の高い独話（モノログ）を主対象としており、学会等における口頭発表の音声 300 時間分（以下「模擬講演」）、その他（インタビュー・対話・朗読など）から構成される。『日本語話し言葉コーパス』は、日本語の自発音声を大量に集めて多くの研究用情報を付加した話し言葉研究用のデータベースであり、2004 年春の完成時に質量ともに世界最大の自発音声研究用データベースになるものと期待されている。

4 理論の枠組み

4.1 談話機能の枠組み

談話における発話の位置付け及びその機能についての枠組みには、Stenstorm(1994)による「談話の階層 the discourse hierarchy」を一部改めて引用する。次はその概略である。

言葉による相互行為の最小単位は「やりとり (exchange)」である。「やりとり」は、最低限二人の話し手による各々一つずつのターンから成る。基本的には、「<質問をする><答える>」「<挨拶をする><挨拶を返す>」のように「一方が開始しもう一方がそれに応じる initiate and respond」という隣接ペアを構成する。話し手は、自らのターンの中でこのような何らかの機能を持った発話を一つあるいはいくつか組み合わせて「やり取り」を進める。本研究ではこのような枠組みを「聞き返しストラテジー」の談話機能の分類に適用することとする。

4.2 Brown&Levinson のポライトネス

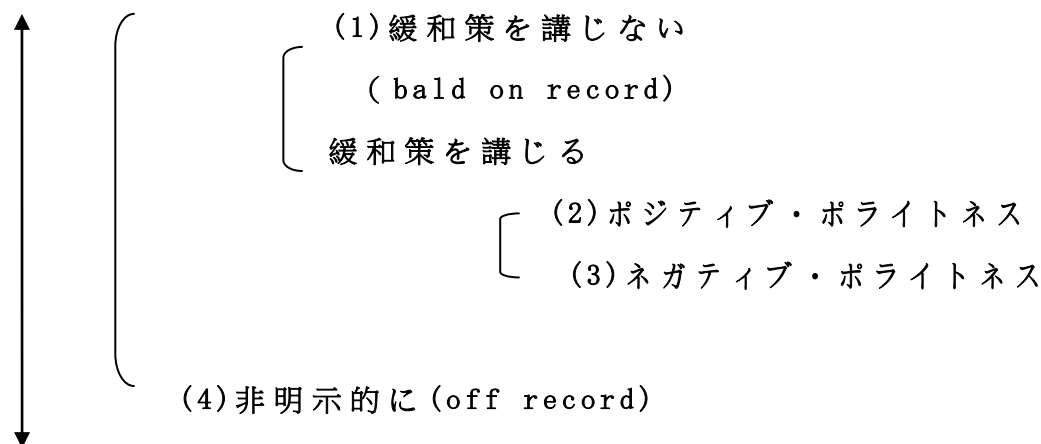
ポライトネスに関して、最も影響力を持っている学説は、

¹ コーパス設計の詳細は（前川他 2000）を参照されたい

B&L (1987(1978))によって出された。B&L (1987(1978))のポライトネス理論の根幹をなすものは、Goffman(1967)によって提唱された Face (面子) という概念である。「名誉」とか「評判」とかといった意味で ‘Face’ という語ではじめて使ったのは 1876 年に Arrangements by which China has lost face (その取り決めによって中国が面子を失った) という表現で中国語の丟臉 (面目を失う) の訳語として用いられたもののようだ。その後、Face は saving face (面目を保つ) とか losing face (面目を失う) といった表現で広く使われてきた。ポライトネス理論においては、Face とは、人間一人一人が主張したい社会的な自己イメージのことで、「ポジティブ・フェイス (積極的面子)」と「ネガティブ・フェイス (消極的面子)」という二つの面を持つ。ポジティブ・フェイスは人から尊敬されたい、評価されたい、よく思われたい、認められたいという願望、ネガティブ・フェイスは他人の行動に邪魔されたくない、押さえつけられたくない、行動を自由に選択したいという願望である。そして、これらの面子を傷つける恐れのある行動を Face threatening acts (面子威嚇行動、以下、FTA と省略) と呼ぶ。円満な人間関係を保持し、円滑なコミュニケーションを図るためには FTA による面子の威嚇度を最小にとどめるようなストラテジーをとればいいわけである。

小 FTA を行う

明示的に (on record)



(5) FTA を行わない

大

(B&L 1987:60 を基に作成)

[図 1] FTA の度合い (フェイスを失う / 失わせる危険度の評価)

5. データの分析と考察

本研究では、CSJ の自由対話における日本語母語話者の自然な発話場面での「聞き返し」ストラテジーを表現形式、機能、ポライトネスの観点から分析し、その使用実態を明らかにし、性別との関わりを検討する。

5.1 表現形式における「聞き返し」ストラテジーの分類

尾崎 (1993, 2001)、猪狩 (1999)、テンチャローン (2007) を参考にし、「聞き返し」の表現形式を非エコー型、エコー型 +a 型、エコー型の通りに分類した。

(1) 非エコー型：反復を用いない表現である。

(例 1: D03M0037 のデータより) (L: 女性 ; R: 男性)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
68	59	*	L	(D た)ちょっと変えてみたりとか>{<}?。 [↑]
69	60	*	R	<変えて> {>} みて、アー、とかね、変えてみたりとかね。
70	61	*	L	(笑)。
71	62	*	R	(笑)。
72	63	*	L	おかしい。
73	64	*	L	(笑)、そうなんだ。
74	65	*	R	そう。
75	66	*	R	<u>マー、一つの職業病でしょうかね?。</u> [↑]
76	67	*	L	オー、それはでも。
77	68	*	L	(D: つい) ずっと付いて回るからやですよ ね。
78	69	*	R	そうそう。
79	70-1	/	R	マー、これもやっぱりね,,
80	71	*	L	(笑)。

(2) エコー型+a型：相手の発話を反復したものに他の表現を付け加えた「聞き返し」である。

(例 2: D03F0036 のデータより) ((L: 女性 ; R: 女性))

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容

号				
101	84	*	L	多分、(雑音)、(笑)。
102	85	*	R	ウン、アノ、たまプラーザ<とかも、ウーン、今> {<} イルミネーションが綺麗で。
103	86	*	L	<エエ、エエ、エエ、エエ、行かれます> {>}。
104	87	*	R	そうですね。
105	88	*	R	ウーン。
106	89	*	L	歩いても行かれくるんじゃないですか> {<} ?。[↑]
107	90	*	R	<u><歩いても> {>} 十五分ぐらいですか?。[↑]</u>
108	91	*	L	(雑音)、そうですね。
109	92	*	L	なるほど。
110	93	*	R	ウーン、ウン。

(3) エコー型：相手の発話をそのまま反復する「聞き返し」で、相手の発話を部分的に反復する不完全型、そのまま反復をする普通形、反復した部分+ですかの丁寧形がある
(例 3:D03F0045 のデータより) (L:女性 ; R:女性)

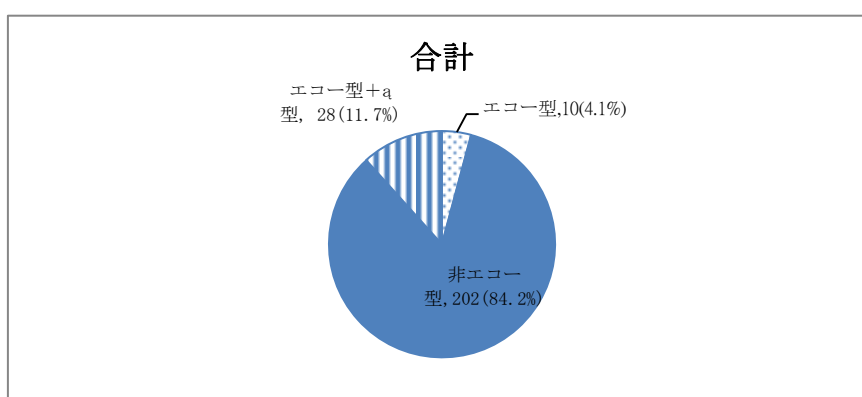
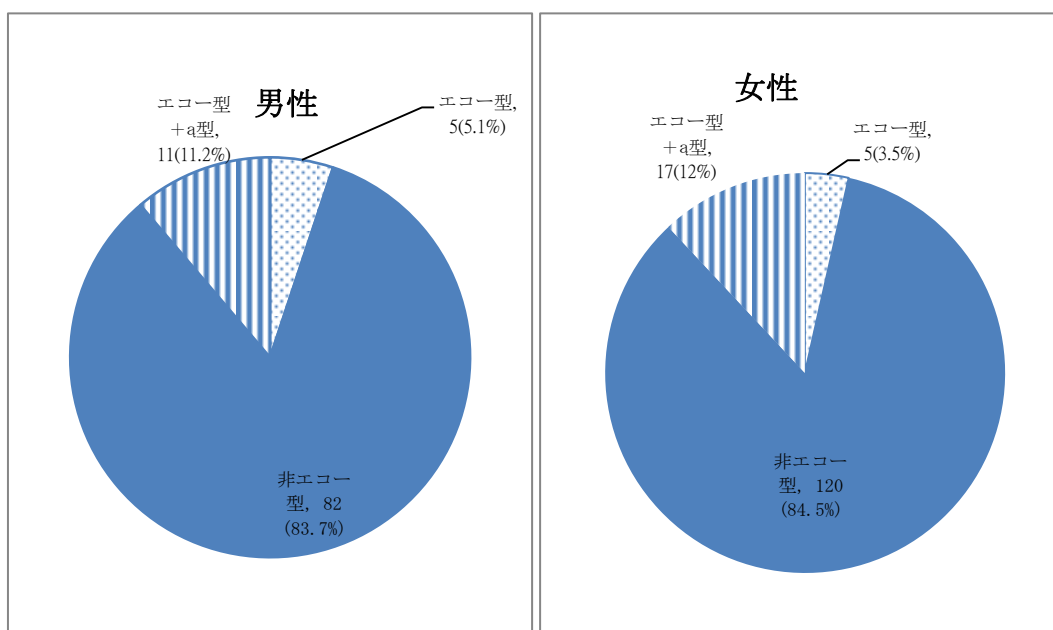
ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
7	7	*	L	どのくらい掛かりました?? [↑]
8	8	*	L	この準備をするのに。
9	9	*	R	<u>準備?? [↑]</u>
10	10	*	L	何か<こう> {<}、ウーン。

11	11	*	R	<レジユメ> {>} ですか?。 [↑]
12	12	*	R	それは言えないです。
13	13	*	L	(笑)、そうなんだ。

5.1.1 表現形式における「聞き返し」ストラテジー出現回数と頻度の比較

[表 2] 表現形式における「聞き返し」ストラテジー出現回数と頻度の比較 (述べ語数)

性別 \ 表現形式	エコー型	非エコー型	エコー型 + a型	合計
男性	5 (5.1%)	82 (83.7%)	11 (11.2%)	98 (100%)
女性	5 (3.5%)	120 (84.5%)	17 (12%)	142 (100%)
合計	10 (4.1%)	202 (84.2%)	28 (11.7%)	240 (100%)



(図2) 表現形式における「聞き返し」ストラテジー出現回数と頻度の比較(述べ語数)

[表2]と[図2]が示すように、CSJの談話資料に見られる「聞き返し」の回数に関して、男女比は男性98回で、女性は142回であり、女性が男性の1.5倍近く上回る結果となっている。男性より女性の会話の方が「聞き返し」の回数の方が多い点から見ると、女性の会話は男性の会話よりリラックスした状態で展開していくことが窺われるようである。

また、「聞き返し」表現形式の使用頻度を比較してみると、男性女性共「非エコー型」が最も顕著で、次に使用頻度が高かったのは、「エコー型+a型」である。

5.2 機能における「聞き返し」ストラテジーの分類

尾崎(1992)の論考では「聞き返し」を六つに分類しているが、今回の調査では「聞き取り確認・説明要求」、「反復・説明要求」の使用回数がゼロであったため、「聞き返し」ストラテジーの分析対象を以下の四つの「聞き返し」に分類した。

(1)反復要求：相手の発話が聞き取れなかったときに相手にその発話の繰り返しを要求する

(例4:D03F0040のデータより)(L:女性;R:女性)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
122	109-1	/	L	おかしい、何か友達が、アノ、今,,
123	110	*	R	ウン、エー。
124	109-2	/	L	雑誌を作っていて,,
125	111	*	R	雑誌ですか?。[↑]

126	109-3	*	L	エー。
127	112	*	R	凄い。
128	113	*	L	そうなんですけど。
129	114	*	L	何かね、東京ではね、あんまり火がまだ付いていないんですけど。
130	115	*	R	ウン、エー。
131	116	*	L	最近大阪で持ってったら、すぐ火が付いたって、その反応が早い?? [↑]
132	117	*	R	エー、アー、分かるような気がする。

(2)説明要求:相手の発話を理解できなかった時にその発話に対する説明を要求する。

(例 5:D03M0017 のデータより) (L:女性 ; R:男性)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
173	133	/	L	何となく。
174	132-2	*	R	ちょっとずつ。
175	134	*	L	ちょっとずつ。
176	135	/	R	分かっているかもしれない。
177	136	*	R	(笑)
178	137	*	L	視覚と聴覚の関係が?? [↑]
179	137	*	R	<u>関係が。</u>
180	138	*	L	ハー、例えば、テレビ見てて、テレビの(Dし)喋ってる人が喋ってるみたいに思っちゃってことですか?。[↑]

(3)聞き取り確認要求：相手の発話の聞き取りが正しいかどうか、自信が持てなかった時に確認を要求する。

(例 6:D03F0040 のデータより) (L:女性 ; R:女性)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
161	143	*	R	で、ミナミが心斎橋難波。
162	144	*	L	ハイハイハイハイハイハイハイ。
163	145	*	R	辺りですよ。
164	146-1	/	R	で、キタはわりと、アノ、お上品な,,
165	147	*	L	ハイハイハハイ。
166	146-2	*	R	町ですよ。
167	148	*	L	この前行ったの多分キタかな<グラ> {<} っていうの知ってます?? [↑]
168	149	*	R	<キタですか> {>}。
169	150	*	R	グラフ?? [↑]
170	151	*	R	知らないです。
171	152	*	L	家具屋さんがカフェとかいっぱい今やってるんですけど。

(4)理解確認要求：相手の発話に対する理解に正しいかどうか、自信が持てなかった時に確認を要求する。

(例 7:D03F0040 のデータより) (L:女性 ; R:女性)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
-------	-------	-------	----	------

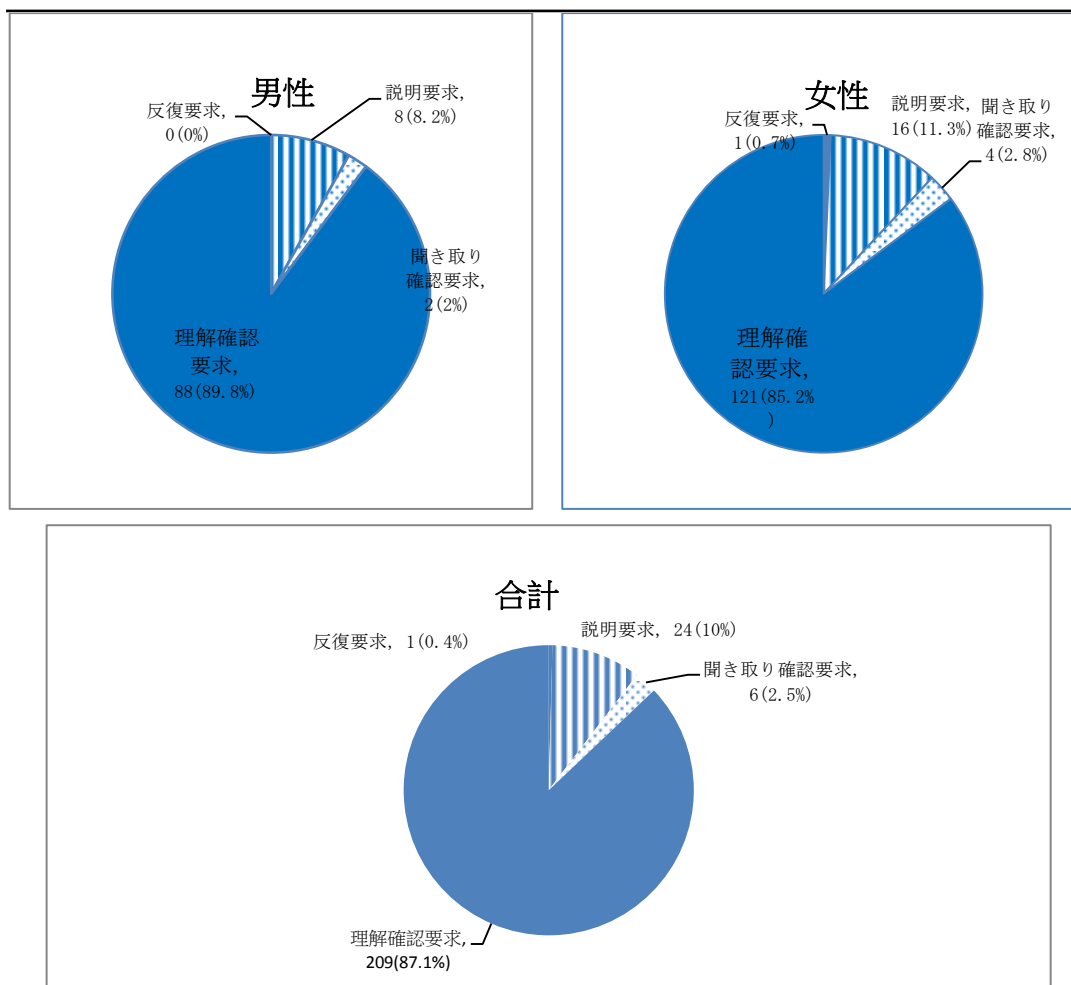
号		了		
117	93-1	/	L	フーン、セメントってどうやって/少し間/ 作るん,,
118	94	*	R	< (Dセメン) > {< }。
119	93-2	*	L	<ですか> {>} ?。 [↑]
120	95	*	R	ちょっと (Dす)、(咳)。
121	96	*	L	大丈夫ですよ。
122	97-1	/	R	ハイ、エー、/少し間/マー、/少し間/基本的 に石灰 (Dす),,
123	98	*	L	ウーン。
124	97-2	*	R	<u>石とかあるじゃないですか?</u> 。 [↓]
125	99	*	L	ウーン。
126	100	*	R	ああいうのを、マー、焼いて作るらしいです。

5.2.1 機能における「聞き返し」ストラテジー出現回数と頻度の比較

(表3)は、「聞き返し」ストラテジーの機能ごとの出現回数の結果を性別に示したものである。

[表3]機能における「聞き返し」ストラテジー出現回数と頻度の比較(述べて語数)

機能	反復要求	説明要求	聞き取り確認要求	理解確認要求	合計
性別					
男性	0(0%)	8(8.2%)	2(2.0%)	88(89.8%)	98(100%)
女性	1(0.7%)	16(11.3%)	4(2.8%)	121(85.2%)	142(100%)
合計	1(0.4%)	24(10%)	6(2.5%)	209(87.1%)	240(100%)



[図 3]機能における「聞き返し」ストラテジー出現回数と頻度の比較（述べ語数）

[表 3]よりわかるように、CSJ の談話資料に見られる修復機能における「聞き返し」ストラテジー出現回数と頻度に関しては、全体として「理解確認要求」が最も頻出することが示されている。それは男性、女性を問わず、「理解確認要求」を用いて、相手の発話への理解や関心を示しながら理解しようとする姿勢が読み取れる。次いで「説明要求」、「聞き取り確認要求」の順で表れている。この点は日本語学習者の「聞き返し」ストラテジーと違った結果が観察される。池田(2003)の研究によると、日本語が十分でない学習者は相手の発話を「聞き取る」ことに集中するため、ほとんど「反復要求」及び「聞き取り確認要求」のストラテジーを用いていることがわかる。

また、男性(89.8%)の談話資料では「理解確認要求」が女性(85.2%)より多く、一方、女性(11.3%)の談話資料では「説明要求」が男性(8.2%)より多いという傾向があることが観察された。

5.3 「聞き返し」におけるポライトネス・ストラテジー

5.2.1 で示したように、男性の談話資料では「理解確認要求」が女性より多いという傾向があることが見られた。(例 8) に示すように、117 行目の 99L「言葉に対し、言葉言語(?) ってどう。」に 118 行目の 100L「(Dお) 思いますか?。[↑]」が繋がっている。そして、その後、124 行目の 105R「アノー、マ、一応色んなルールっていうのあるじゃないですか?。[↑]」と 128 行目の 107-2R の「あるいは語彙(?とか) 決まったりとかね」。のように、「～じゃないですか」や「～ね」の「理解確認要求」のストラテジーを使用し、「話し手に自分の自由や領域を侵害されたくない」という聞き手のネガティブ・フェイスに配慮し、FTA を緩和するためのストラテジーであることが読み取れる。

(例 8:D03F0045 のデータより) (L:女性 ; R:女性)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
117	99	*	L	言葉に対し、言葉言語ってどう。
118	100	*	L	(Dお) 思いますか?。[↑]
119	101	*	R	ウン。
120	102	*	L	漠然と<してます> {<}。

121	103-1	/	R	< (D? ん) 漠然と > { > }、シー、僕はね、 かなり,,
122	104	*	L	(D? ん)。
123	103-2	*	R	(D ん) 言語に対してはね。
124	105	*	R	アノー、マ、一応色んなルールっていうの ある <u>じゃないですか?</u> 。[↑]
125	106	*	L	ウン。
126	107-1	/	R	マ、文法があったりとか,,
127	108	*	L	ウン。
128	107-2	*	R	あるいは語彙(?とか)決まったりとか <u>ね</u> 。
129	109	*	L	ウン。

一方、今回のデータから、女性は男性より「説明要求」が多い傾向にあることが明確になった。実例を見ながら、探求してみよう。(例9)のように、TRP³の誤認により発話を始め、重なりを起こした会話参加者120行目の104Rが、すぐに発話を中止し、ターンを調整している。そして、真のTRPを待つ、ターン124を取り、108Rが「どんな内容なんですか?。[↑]」という「説明要求」というストラテジーは、聞き手のネガティブ・フェイスに配慮しているのであり、相手のネガティブ・フェイスのストラテジー2「質問・聞き返し」に当てはまると考えられる。

(例9:D03F0045のデータより)(L:女性;R:女性)

ラ イ ン	発 話 文 番 号	発 話 文	話 者	発話内容
-------------	-----------------------	-------------	--------	------

³ Sacks et al.(1974:704)によれば、あらゆる発話順番について、発話順番構成単位の最初の transition relevance place(発話順番の以降が適切となる場所、以下 TRP と記す)。

番号		終了		
119	103	*	L	何かこう心理テストとかそういうのも自分で勉強したりとか、(D?す)するん<そういうの> {<} ?? [↑]
120	104	*	R	<心理> {>} テスト?? [↑]
121	105	*	L	何かよくあるじゃ (D?ぬん) (笑) ない、私が何か心理学やった時、先生が何か結構よく心理テストをやってて。
122	106	*	R	(笑)。
123	107	*	L	(笑)。
124	108	*	R	<u>どんな内容なんですか？。 [↑]</u>
125	109-1	/	L	(笑) (D?ゆ) わりと性格判断に近い,,
126	110	*	R	アー。
127	109-2	*	L	ようなものだ<ったんだけど> {<}。
128	111	/	R	<そういうのはでも> {>} 何かありましたよ。
129	112-1	*	R	性格心理学っていうので、(H),,
130	113	*	L	ア、別なんだ。
131	112-2	*	R	アー、そうですね。

6. おわりに

本研究では、CSJの自由対話を用いて、日本語母語話者の自然な発話場面での「聞き返し」ストラテジーを表現形式、機能、ポライトネスの観点から考察を行い、その使用実態を明らかにし、性別との関わりを検討した。その結果、主に次のことが明らかになった。

(1) 今回の談話資料では、「聞き返し」ストラテジーの表現形式においては、「非エコー型」、「エコー型」、「エコー型 + a 型」

の 3 種類の聞き返しが観察された。

(2) 「聞き返し」 ストラテジーの機能においては、「理解確認要求」、「説明要求」、「反復要求」、「聞き取り要求」のストラテジーが見られた。

(3) 「聞き返し」表現形式の使用頻度を比較してみると、男性女性共に「非エコー型」が最も顕著で、次に頻度が高かったのは、「エコー型 + a 型」の使用である。機能における「聞き返し」ストラテジーの頻度に関しては、男性、女性、両方とも「理解確認要求」を用いて、相手の発話への理解や関心を示しながら理解しようとする傾向が窺がえる。

(4) ポライトネス理論の観点からすると、聞き返しストラテジーを遂行するにあたり、「理解確認要求」と「説明要求」を多用するのは、聞き手のネガティブ・フェイスに配慮したためであると考えられる。

本研究では、日本語母語話者を対象に考察を行ったが、台湾人日本語学習者がどのような「聞き返し」をしているのか、日本語母語話者との比較、中国語の影響についても今後研究したい。また、本研究では、CSJ の「自由対話」における日本語母語話者の「聞き返し」を対象に考察を行ったが、学習者の個人差にも注目しながら、日本語学習者は会話の場面や対話の場面など様々な場面でどのような「聞き返し」を使用しているのかに関する考察も明らかにしたいと考えている。

「聞き返し」というストラテジーは日本語の会話の中で非常に大切なものである。わからない、聞こえないという問題と常に直面しながら会話を進めていかなければならない日本語学習者には、言うまでもなく、「聞き返し」の仕方や機能などの習得が特に重要になってくる。この点については、尾崎 (1981) も「聞き返し」を含めた伝達技術を意識的に指導していく必要があると指摘している。

つまり、まずは、教科書に「聞き返し」の文型やモデル

会話を学習項目として明示し、次は「聞き返し」の文型やモデル会話が使えらるような教室内での練習が実際の会話授業に取り入れて、練習の結果が使えらるよう、実際に日本人とインターアクションする場面が与えらるべきであらう。このように、学習者の話す力を養成するのに活用していけるのみならず、それもコミュニケーションの目標を達成するための共同・協力作業や相互理解のトラブルを未然に防ごうとする一つの手段であらう。

参考文献

新井芳子、「コミュニケーション能力向上に関する一考察－『聞き返し』の観点から－」、『新世紀之日語教学研究国際会議論文集』、台湾東呉大学日文系、2000、205-223

池田伸子、「ビジネス会話における『聞き返し』ストラテジーの使用傾向－ビジネス日本語教育用教材開発基礎として－」、『広島大学留学生センター紀要』、vol.13、2003、pp37-45。

猪狩美保、「初級日本語学習者の『聞き返し』のストラテジー初級日本語教科書との関連から－」、『横浜国立大学留学生センター紀要』、1999、15-25。

伊藤博子「対談番組における“Repair”」『日本語学』第10巻第6号、1991、62-74。

猪崎保子、「日本人とフランス人日本語学習者の会話にみらる『修正』のストラテジー」、『世界の日本語教育』、7号、1997、77-95。

宇佐美まゆみ・木林理恵、「改定版：基本的な文字化の原則」(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)、『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』、平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B(2)研究成果報告書、2007、4-21。

小熊均、「日本語の対話に関する心理学的研究」、『日本語学』、

3月号、1984、60-66。

大野陽子、「日本語初級学習者の聞き返しのストラテジー使用の実態—英語母語話者の場合—」、『日本語教育学会春季大会』、1999、173-178。

大平未江子、「接触場面の質問—応答連鎖における日本語母語話者の『言い直し』」、『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』、第3号、1999、67-85。

尾崎明人、「上級日本語学習者の伝達能力について」、『日本語教育』、1981、41-52。

尾崎明人、「接触場面の訂正ストラテジー「聞き返し」の発話交換をめぐって—」、『日本語教育』、81号、1993、19-30。

尾崎明人、「接触場面における在日ブラジル人の「聞き返し」とその回避方略」、『社会言語学』、4、2001、81-91。

黄英哲、「接触場面の会話におけるリペアの仕組と日本語母語話者の発話『調整』」、『僑光学報』、第18号、2000、116-128

小林純子、「相手の顔を立てる方法—日米の対照研究」、『日本語・日本文化』、大阪外国語大学留学生別科日本語科16号、1990、85-104。

坂本正他、「日本語のフォリナー・トークに対する日本語学習物の反応」、『日本語教育』、69号、1990、121-143。

西条美紀、「接触場面におけるメタ言語的方略の有用性—発話理解の問題を解決する学習方略についての実証的研究—」、『世界の日本語教育』、国際交流基金8、1998、99-119。

テンチャローン・モンルタイ、「電話における学習者の『聞き返し』ストラテジーの使用について—発話意図と表現形式に注目して—」、『言語文化と日本語教育』、第34号、2007、11-19。

トムソン木下千尋、「初級日本語教科書と『聞き返し』のストラテジー」、『世界の日本語教育』、国際交流基金4、1994、31-43。

永山友子、「日本語教科書の会話例と日本語母語話者の実際の会話との比較－音声言語による repair の相互作用の観点から－」、『日本語教育』、90号、1996、1-12。

前川喜久雄・籠宮隆之・小磯花絵・小椋秀樹・菊池英明（「日本語話し言葉コーパス」、『音声研究』、Vol. 4、No. 2、2000、51-61。

Brown, Penelope and Levinson, Stephen, Politeness: Some Universals in Language Usage (reissued) Cambridge University Press、(1987(1978))

Goffman E., Interaction ritual: essay on face-to-face behavior. Garden City, New York、1967

Sacks, H., Schegloff E. and G. Jefferson、A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation. Language、50、1974、695-735

Schegloff, E. A., G. Jefferson, and H. Sack. 'The preference for self-correction in the organization of repair'. Language、50、1977、696-735、

Stenstrom, A-B、An introduction to spoken interaction. Longman、1994

附記

本稿は「日本語母語話者の『修復』の様相－ポライトネス理論の見地から－」『日本語教育学会 2012 年度第 2 回研究集会』日本・熊本学園大学会場（2012 年 6 月）で口頭発表したものに加筆・修正を施したものであり、100 年度國科會專題研究計畫主持人「日語談話中的「發話者交替 turn-taking) 和修正 (repair) 現象－以『日語談話資料庫 (CSJ)』為資料」計畫番号 NSC100-2410-H-156-014, 研究代表者吳秦芳) の研究成果の一部です。また、本稿執筆にあたり、査読者の先生方に貴重なご教示をいただきました。心より感謝申し上げます。

